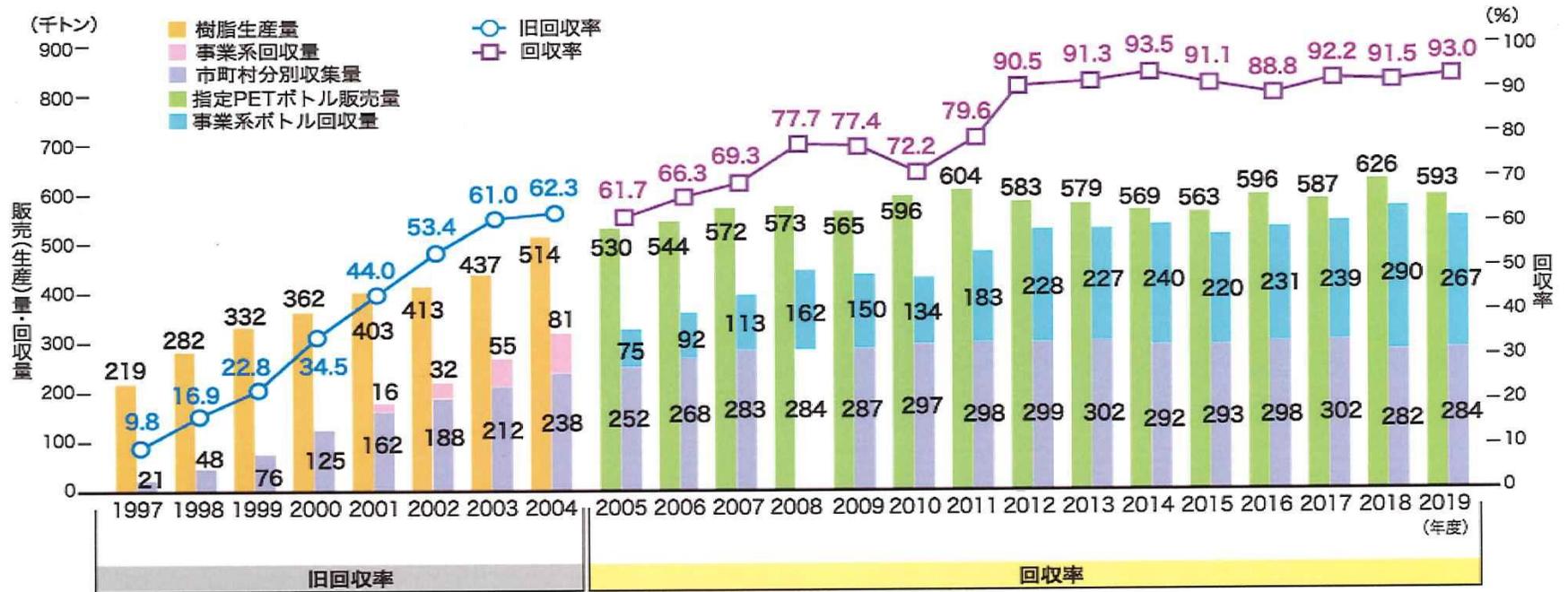


ペットボトルの販売（生産）量・回収量および回収率の推移

2021/6/2

回収率推移など | 統計データ | PETボトルリサイクル推進協議会

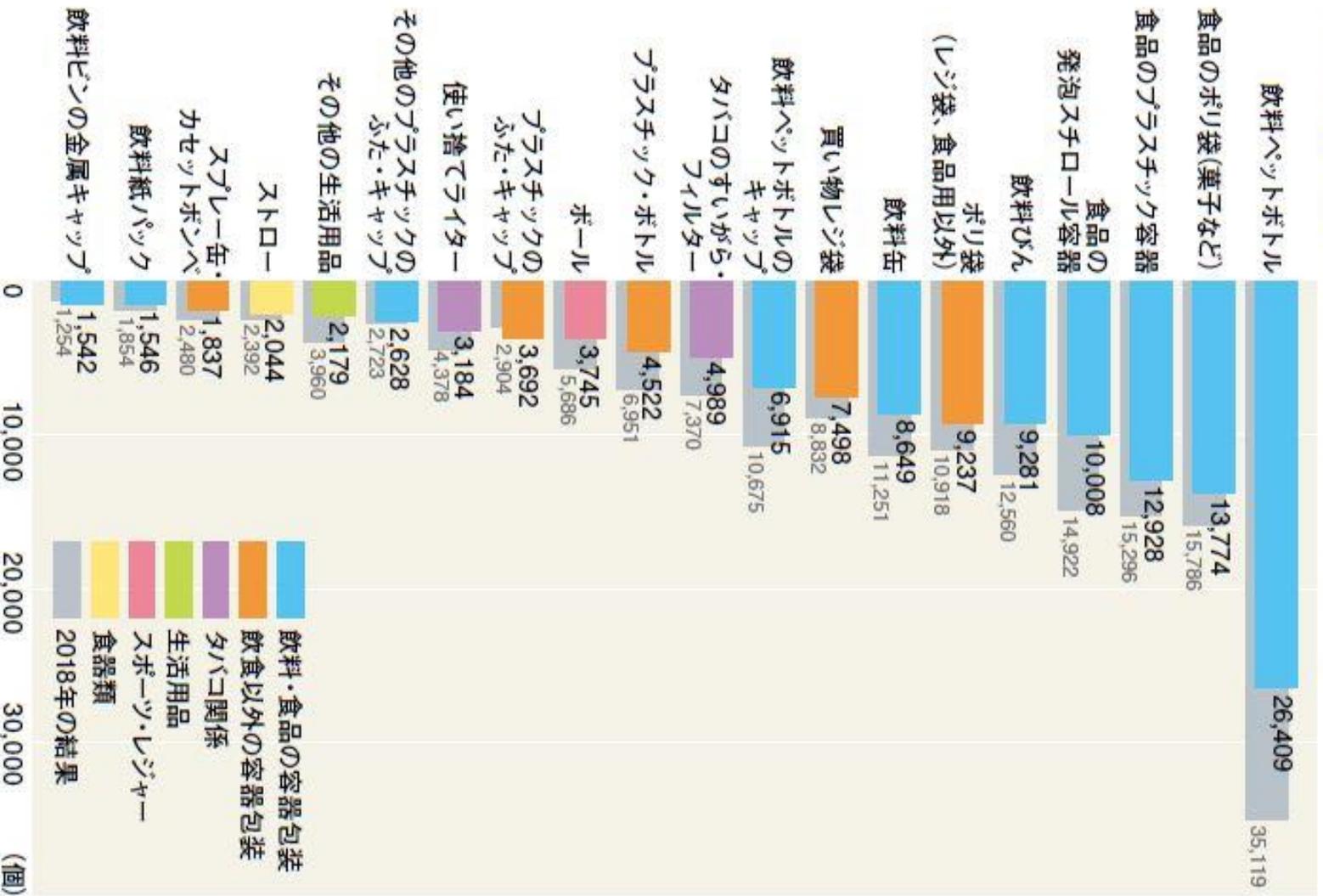


227億本 × (100% - 回収率88.8%) = 約25億本 (2015年)



荒川河川敷

●回収された散乱ごみ上位20 ※破片・かけら類は除く



漂着ごみ実態把握調査（占める割合が大きい品目）



- ・漂着ごみを品目ごとに集計し、人工物のうち占める割合が大きい上位10位を整理。
- ・個数ベースでみると、ボトルのキャップ、プラ製ロープ・ひも、木材、飲料用ペットボトル（2リットル未満）、プラ製その他漁具が多かった。
- ・重量ベースでみると、木材、プラ製ロープ・ひも、硬質プラスチック破片、プラ製漁網、飲料用ペットボトル（2リットル未満）が多かった。

品目上位10種（個数ベース）

No	品目	割合
1	ボトルのキャップ、ふた	17.6%
2	プラ製ロープ・ひも	16.6%
3	木材(物流用パレット、木炭等含む)	9.2%
4	飲料用ペットボトル(2L未満)	6.9%
5	プラ製漁具(その他)	4.2%
6	プラ製食品容器(カップ等)	4.0%
7	プラ製荷造りバンド・ビニールテープ	3.7%
8	ウレタン	3.5%
9	プラ製食器(スロ、フォーク、スプーン、マタ、ナイフ)	3.5%
10	プラ製ブイ	3.2%

品目上位10種（重量ベース）

No	品目	割合
1	木材(物流用パレット、木炭等含む)	32.9%
2	プラ製ロープ・ひも	19.1%
3	硬質プラスチック破片	9.0%
4	プラ製漁網	6.3%
5	飲料用ペットボトル(2L未満)	4.2%
6	発泡スチロール製フロート・ブイ	3.9%
7	プラ製ブイ	3.5%
8	プラ製漁具(アナゴ筒)	3.4%
9	靴(サンダル、靴底含む)	1.2%
10	ガラス製食品容器	1.2%

※個数ベースでは「破片」は集計していない

※景観面や回収の手間の観点から個数ベース、重量は処理費用の観点から重量ベースで整理した

地中海で水深992 mの海底に沈んでいるペットボトル

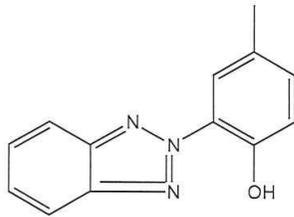


Fig. 5. Types of accumulation areas for debris observed during diving experiments. (A) Accumulation of debris along a channel (Dive 8, depth 687 m, position 43° 37.00' N, 07° 10.2' E). (B) Accumulation of debris around a wreck (Dive 8, depth 438 m, position 43° 36.17' N, 07° 09.12' E). (C) Accumulation of debris around rocks (Dive 16, depth 992 m, position 43° 03.00' N, 05° 10.00' E)

全てのペットボトルのキャップから環境ホルモンが検出

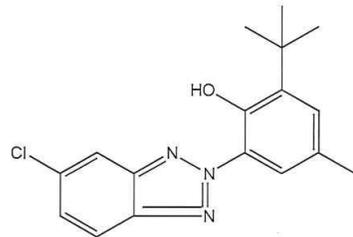
表. 市販ペットボトルのキャップから検出されたベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤 (ng/g)

製品名	材質	UV-P	UV-9	UV-PS	UV-329	UV-326	UV-320	UV-350	UV-328	UV-327
おーいお茶	PP	104	n.d.	n.d.	n.d.	12	n.d.	n.d.	n.d.	0.08
森の水だより	PE	5	n.d.	5.5	n.d.	1	n.d.	n.d.	0.16	n.d.
午後の紅茶(ホット)	PE	47	n.d.	n.d.	n.d.	26	0.06	0.11	0.54	n.d.
生茶	PE	10	1.0	0.5	7.8	9	0.09	0.72	0.21	0.04
アクエリアス	PE	120	0.46	1.6	n.d.	15	0.13	0.13	0.87	0.14
ポカリスエット	PE	57	n.d.	1.8	8.2	6	0.11	0.55	0.67	0.16
トロピカーナ	PP	16	n.d.	n.d.	n.d.	73	n.d.	0.33	2.82	0.29
三ツ矢サイダー	PE	160	n.d.	30.2	n.d.	9	n.d.	n.d.	0.68	0.17
ORANGINA	PP	34	n.d.	n.d.	6.0	234	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.
Skal	PP	24	n.d.	2.0	2.0	4	n.d.	n.d.	1.86	0.24
		検出限界以下								
		定量限界以下								



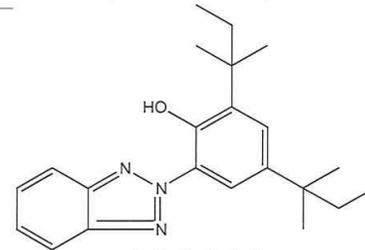
UV-P

内分泌攪乱化学物質

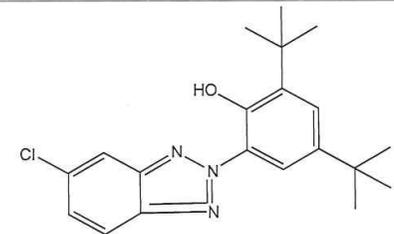


UV-326

REACH規制高懸念物質



UV-328



UV-327

化審法
第一種監視化学物質

プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律案につ いての会長声明

本年3月9日、第204回通常国会に「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律案」(以下「本法案」という。)が提出され、現在衆議院で審議中である。本法案は、製造事業者等が努めるべき環境配慮設計に関する指針を策定し、指針に適合した製品であることを認定する仕組み(以下、この認定を受けた製品を「認定製品」という。)を設けること、ワンウェイ(使い捨て)プラスチックの提供事業者が取り組むべき判断基準を策定すること等を内容とするものである。

当連合会は、本年3月18日付けで、「今後のプラスチック資源循環政策についての意見書」(以下「意見書」という。)を取りまとめ、①リデュース(発生抑制)の徹底を図ること、②熱回収の割合を限りなく低減させること、③拡大生産者責任及び事業者責任を徹底した循環型社会にふさわしい統一的な法制度を整備すること、④プラスチックに使用される有害化学物質を規制することを含む政策を実施すべき旨の意見を述べたところである。

本法案は、プラスチックの資源循環の促進について、事業者の自主性に任せ、行政指導を重視するものであるが、このような手法は過去の例に鑑みれば実効性が乏しく、プラスチック問題の抜本的解決とはならないことが強く懸念されるところである。本法案が成立した場合であっても、少なくとも、認定製品への積極的支援や、ワンウェイプラスチックを多く提供する事業者への勧告・公表・命令等の厳格な運用等、意見書の①及び②の趣旨に沿った今後の運用は必須である。

また、本法案は、プラスチック資源について、容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律(以下「容器包装リサイクル法」という。)によるルートを活用した分別回収を市町村に行わせることを想定しているが、これは、回収・リサイクルのうちでも最も費用のかかる分別・回収コストを市町村の負担としているという現状の容器包装リサイクル法の問題点を固定化することになる。意見書の③のとおり、拡大生産者責任(製品の使用・廃棄等の後においても、生産者が適切な処理等の責任を負うという考え方)の徹底が必要であり、分別・回収コストを含めたプラスチック資源の回収・リサイクルの責任を生産者に課すこととすべきである。

さらに、本法案は、プラスチックに使用される有害化学物質の規制について何らの規定も置いていないが、意見書の④のとおり、プラスチック製品の製造事業者等に対し、一定の物質の使用禁止、添加剤のポジティブリスト制(安全性を評価した物質のみを使用可能とする制度)の導入、成分表示の義務化等の生産段階からの規制を導入すべきである。

当連合会は、本法案の審議において、以上の点を踏まえた十分な検討が行われることを強く求めるものである。

2021年(令和3年)5月21日

日本弁護士連合会

会長 荒

中

2021年6月3日 参議院環境委員会 日本共産党山下芳生
出典 プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律案についての会長
声明 2021年(令和3年)5月21日 日本弁護士連合会 会長 荒 中

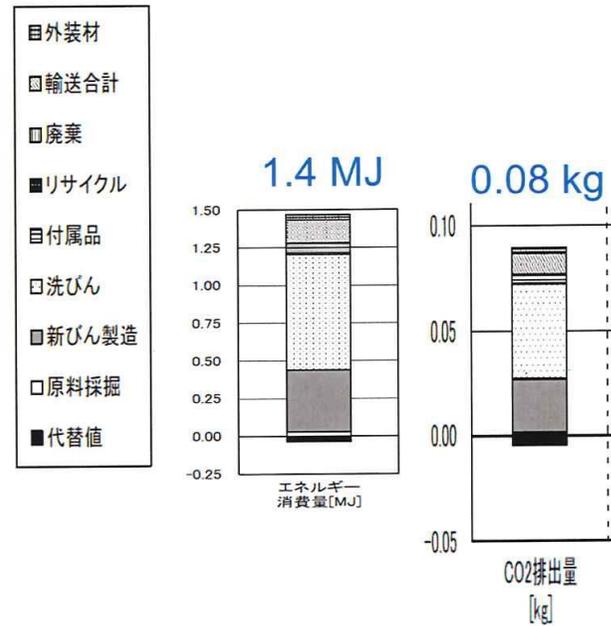
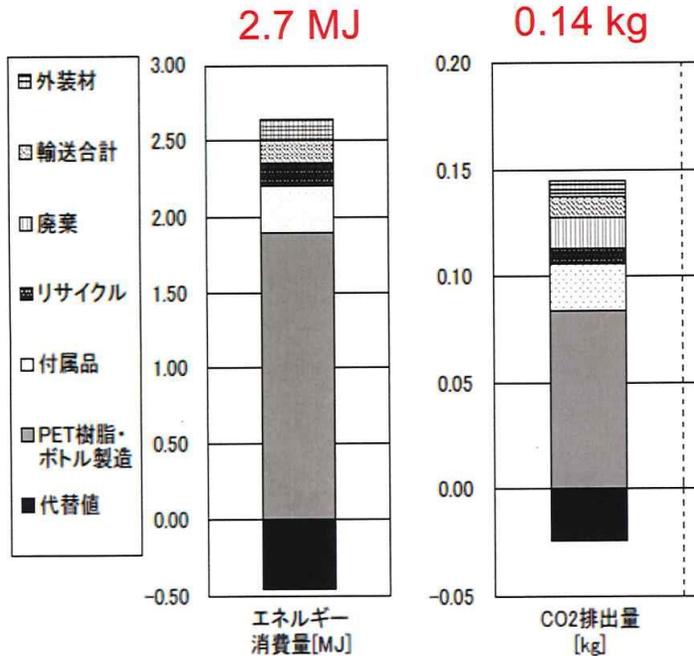
ペットボトルの使用拡大をめぐる主な動き

年	事項
1967頃	米国デュポン社、ペットボトルの基礎技術確立
1974	米国において炭酸飲料用に使用開始
1977	日本において、しょうゆ500ml容器として使用開始
1982	食品衛生法が改正され清涼飲料用にPETボトル使用が認められる （「当面は1リットル以上の大きさ、自販機で販売しない」とする自主規制）
1996	（社）全国清涼飲料工業会が小型PETボトルの自主規制を廃止
1997	容器包装リサイクル法がPETボトルにも適用
1997	自動販売機でPETボトルの販売開始

ペットボトルはガラス製リターナブル瓶に比べてライフサイクルでのエネルギー消費量、CO₂発生量が2倍程度多い

ペットボトル(500 mL)

ガラス製リターナブル瓶(633 mL)



平成16年度

容器包装ライフ・サイクル・アセスメントに係る

調査事業 報告書

— 飲料容器を対象とした LCA 調査 —

財団法人 政策科学研究所

使い捨てプラスチック削減を最優先にして、
多様なアイデアを取り入れた行政のイニシアティブを



サンフランシスコ空港の
マイボトル用給水器
カウンターがついていて、ペットボ
トル削減本数を表示して意識啓発
もはかっている。



2021年6月3日 参议院环境委员会 日本共产党 山下芳生 出典NHK BS1スペシャル
「2030 未来への分岐点 第3回 プラスチック汚染の脅威 大量消費社会の限界」

資料11

